

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River



和

水町の中心部には菊池川が流れ、町は全体として良質の水に恵まれています。特に旧菊池川に囲まれた状態です。町内は殆どが山地か丘陵で、平地であつても河川より高い所にあるので、菊池川本流の水は水田の灌漑用水(かんがい)としてはあまり役にたちません。そのため支流や谷川、そしてあちこちの溜池を利用します。その溜池にはいろんな水草が生えています。その中にはヒシという植物があります。藻の一種で葉は水面に浮く1年草です。アカバナ科ヒシ属、茎は細長く節から糸状の根が出ます。葉は茎の先に集まつて出て、いわゆるひし形であり、葉柄は長さ10〜20cmでその途中に気室があつて浮きの役目をしているのが浮き葉となつています。葉の間から水面上に白い小さな四つ弁の花が咲き、1日1花の花が咲きその後ガクが変わつてトゲのある果実がでてきます。6月頃から花が咲き始め8月まで次々と咲き、秋になると実は熟します。根は水底まで伸びているので水面を移動することはありません。したがつてホテイアオイやアマゾンチドメグサのように離れた

所に行つて移動繁殖するようなことはありませんが、池によって富栄養化が進むと異常繁殖によつて水面を覆い尽くし、水鳥など生息できなくなります。また既存の池の貴重な植物が消滅したりします。異常繁殖したヒシが冬に枯れて底に沈積腐敗すると悪臭を放つようになり水質が悪化します。

ヒシは水草だからその茎の長さは水深に応じて長くなりますが2mが限度です。それ以上の深さになると底に根を張ることができず水面を漂うこととなります。そうするとカモやカイウブリが泳げる水面ができず。

9〜10月頃熟した実は逆三角形の両角に鋭いトゲが2本あり、そのトゲと一緒に皮をむいて白い身を出します。生で食べても湯がいて食べても甘い栗のような味がしてとてもおいしいものです。

竜門のお寺の近くや下津原、上板楠のお宮の近くの堤などにヒシは沢山生えています。ヒシの実をちぎりによつて行ったのですが、泳いで採る場合は手が手足に絡まつて危険なので、必ず先輩たちと一緒に行くようにしなければ親達に許しません。

した。

分布は日本・台湾・朝鮮半島・中国などの古い池や沼などに広く分布しています。ヒシという名はちよつと変わった名前ですが、ここから来たのか分かりませんが葉も実も形がひし形に似ているからだろうと思います。ヒシの実には葉草としても良く知られていますが、ヒシの実をアルコールに浸け抗がん剤として利用します。乳腺がん、胃がん、子宮頸がん、子宮ガンなどに効くそうです。また胃がん、食道がんなどには湯がいた実を乾燥して煎じて飲みます。視力の増強にもなると言われています。



ヒシの実

歴史調査の楽しみ方

I 郭の南西下に、6段(⑫)〜⑰)の帯状地形が並列しています。高低差8.9mの山腹を、造成したものです。⑬と⑭では、最大2.3mの段差が付いています。法面は、いずれも削り落されて、各段を繋ぐ通路もありません。それ程の段差ではありませんが、上下の移動には、かなりの困難が伴います。

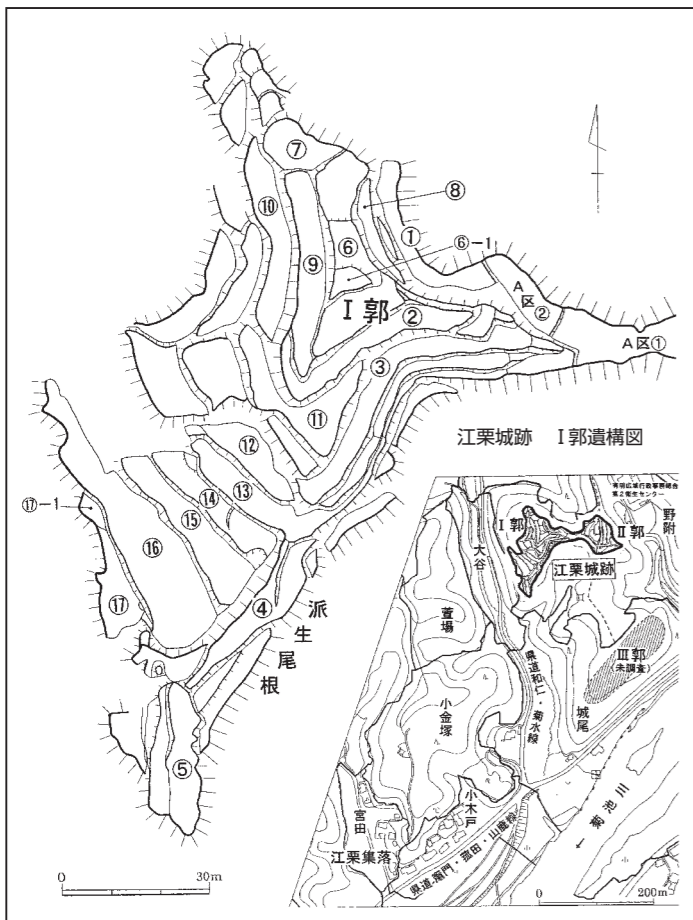
城跡としての強烈な地形が、⑰下にあります。足がすくむ程の絶壁で、高さは10mを越えています。垂直に切り立っており、見事な天然要害の地形です。下部に近づけば、登るに不可能な壁が立ちだかることとなります。I郭の西側は、完璧な守りの状態にあるのです。間近に見降ろす県道(菊水・和仁線)は、城時代からの古道でしょうか。この道は、江栗集落と城跡の間に位置する谷部を走行しています。

次に、⑫〜⑰の平面プランに目を転じます。末広りの山腹に造成されており、⑫が、長さ22m、幅4〜7mと最小で、⑬が、長さ60m、幅14〜7mと最大になり、⑭〜⑰は、幅が徐々に狭くなっていきます。いずれも、造成の度合いが高い平地です。最下段の⑰は、山腹が絶壁に接する変化点にあります。段落ち個所が造成されており、長さ21m、幅8.8〜2mの小平地です。どう考えても、畑地跡ではありません。

「付記」中世城跡は、山(山城)や丘(平山城)を利用して築城されています。平地(平城)の場合は、少しでも高い場所が選ばれました。しかし、今日では、取り巻く環境が変化しているため、当時の縄張りを知ることが、難しくなっています。

平地と比べると、山や丘の方が、まだ、条件は良好です。それでも、大方、畑地や植林地に利用されています。遺構との見極めが大変です。

城跡調査は、「その場所が、城跡という伝承があり、城跡に関連した地名や地名が残っていること」が、大原則になります。その様な場所が、調査の対象地になります。山と丘に残る代表的な遺構は、堀切・空堀・土塁です。これらは、溝や土盛りとして見ることが出来



江栗城跡 周辺図

江栗城跡

5

大田 幸博

(元・菊池川流域同盟副委員長)

さらに、山頂や丘頂の平地です。造成されたことが分かります。

問題は、山腹や斜面部の段状地形です。これまで何度も取り上げてきましたが、「段々畑と、どこが違うのか」という事を、第三者にどのように説明するのが、大変です。主な点は、①各段を繋ぐ野道がないこと。②断面(法面)が、急峻に削り落されていること。③段差面に、落差があること。④肩部に、土塁状の高まりがあること。⑤一見して、段々畑が存在しない様な場所にあること。⑥日当たりが、極端に悪い場所にあること、などが挙げられます。

発掘調査をしても、それを証明することは、難しいです。